



經典餘師

論語三

四

口 11
2047
4



2.047
4

先進第十一

子曰マまハク先進マの礼レ樂ヲ小ハ於テ野ノ人也後ニ進ムの礼レ樂ヲ於テ君ニ子也

如ク之ヲ用ハ則チ先ニ進ム小ハ從ハ人也

我レ陳蔡に從ヒ及バ不ズ

論語朱熹集註

先進第十一

溪世尊譯

子曰マ先進マ於テ禮レ樂ヲ野ノ人也後ニ進ム於テ禮レ樂ヲ

君子也禮ヲ樂ス中ニを得て貴なり然るニ世ノの

象中とシて先進トハ後進ハ今時ノ人ノ道ニ進習ス

右ノ風俗ハ禮樂トモ小田野ノ人ノ如ク野鄙ナリトシ

如ク用ハ之ヲ則チ先ニ進ム小ハ從ハ人也

吾レ先ニ進ムノ心ハ質朴ニ實ニ於テ從ハべクトシ

○子曰マ從ヒ我レ於テ陳蔡者ハ皆ハ不ズ及バ門也

論語三十三 先進第十一 朱熹集註

德行ハ顔淵
子騫冉伯牛仲
弓言語ハ宰我
子貢政事ハ冉
有季路文學子
游子夏

子曰まほく回ハ
我を助者小非
吾言於於て
説バ不所ろ毎

孝哉閔子
騫人其父母昆
弟之言を問セ
不

南容白圭を三
復孔子其兄
之子と以て之
妻と

聖人曾て楚の國へ行かば時陳蔡の処に圍の難
義の拵あり附従し御門弟を思し出らば拵あり座
上り並居るも十人の外に或ハ古織へるも又ハ德行
仕官をわたりて當時御門中より不及しと云う

顏淵閔子騫冉伯牛仲弓言語宰我
子貢政事冉有季路文學游子夏

御座り待りて先顔子を弟一として身の行
大徳なりハ閔子騫冉伯牛仲弓の四人なり言語
能くハ秀ありハ宰我子貢二人なり政務の事に達
しハ冉有子路なり文章巧みなるハ游子夏なり
以上十人なり陳蔡の圍に預り
人々を拵り御側に在り季路ハ子路の事

子曰回也非助我者也於吾言無所
不説

顔子を深く譽りての御説の
仰せ小ハ自余の門人ハ或ハ疑の回答に
ありて共ニ道德を吟味し助るも小顔回ハ何
の回答もなかり學問の助りハ益ある者非ず之然と
吾言の事於て心より説くべしと
りてなり是前より有る如馬心といふ同

子曰孝哉閔子騫人問於其父
母昆弟之言

閔子騫ハ孝行をなす人なり
と見へて其父母昆弟の言を問ふ親類
らも他の人も其父母昆弟の言を問ふと然と
元中のヤと云ふ言の事と與りて言ふなり
同非となく其答の事と與りて言ふなり

南容三復白圭孔子以其兄之子妻
之

南容ハ謹の深き御人なり言辭を女に出さず
常ニ詩經の白圭の篇を三度も唱へ
復しと云ふ白圭とハ玉の義なり其詞の心ハ白圭の
玉ハたとへて瑤出来たりともやと云ふ砥磨をせし玉の

季康子問弟子孰為好學孔子對曰有顏回者好學不幸短命死矣今則亡

顏淵死去矣時其父顏路家貧欲為棺而無椁其子曰鯉也死有棺而無椁吾不徒行以為之椁以吾從大夫之後不可徒行

也取玉人の事ありやハ人ハ貧と富と天の運數有りて中々人カ及バざるの故り身の分限を守りて足る事ありや凡て親の子を愛するに椁なり何ぞ不足の事ありや凡て親の子を愛するに椁なり何ぞ不足の事ありや凡て親の子を愛するに椁なり何ぞ不足の事ありや

吾子鯉の死去の時も棺有て椁なり然バとて吾徒行もなからざる君より下賜する車を賣て椁を作るとも毎礼たるを為すべし且大夫の後たるを以て本より徒行ハ

○顏淵死子曰噫天喪予天喪予

顏淵死去の時聖人深く嘆ひ誠し吾道に於て徳兼備するところ人ハ顏淵たる今今の如く死亡し事是天より我を喪しとありのなりとて

○顏淵死子哭之慟從者曰子慟矣

顏淵死す子之を哭して慟する徒者曰く子慟す

顏淵死す子曰ま

顔淵死す子之を

哭して慟する徒者

曰く子慟す

顔淵死す子之を

哭して慟する徒者

曰く子慟す

顔淵死す子之を

哭して慟する徒者

曰く子慟す

顔淵死す子之を

哭して慟する徒者

曰く子慟す

顔淵死す子之を

曰まはく慟き
と有乎

夫人之為は慟
に非して誰が為

小せん

顔淵死し門人厚

く之を葬んと欲

と子曰まはく不可

なり

門人厚く之を葬

回予と視と父の

顔淵死し門人厚く之を葬んと欲と子曰まはく不可なり門人厚く之を葬回予と視と父の

顔淵死去ありれば聖人殊の御惜ありて哭し小御出ありて餘り御悲とつり御涙落息を妻にまひり從者の曰や聖人よはつるてかくせばハ慟い

曰有慟乎自躬也ハ五慟ハ五口也事ありてのさるハ非夫

人之為慟而誰為又仰せ小誠ハ夫人の為ハ慟を以て餘人ハ

慟哭まはくハ人のハ

○顔淵死門人欲厚葬之子曰不可

顔子の御門人衆より厚く御葬式をなさんと欲し

厚葬之つら厚く葬ハ子曰回也視予猶

父也予不得視猶子也非我也夫二三

子也

此度の葬式思召の叶ハセタハハ後此語あり顔回常小予を愛して父の猶視ら敬まひり

小今予ハ子の猶く致さそと能く是全く我ハ非どして汝の門人夫二三子の輩なりと云

○季路問事鬼神子曰未能事人焉能

事鬼敢問死曰未知生焉知死

鬼神ハ吾先祖の神靈を以て子路の問ハク鬼神ハ

御對凡そ人の道を尽し君父ハ事奉まつて忠孝

の誠を尽すやどなるハ祭りもまた一念の誠ふりて鬼神

能ハ馬の鬼神ハ事とあるや子路ららして問奉る

ハ人死して後ハいつた道理のふりや御答人の生る

の道ハ本陰陽の二氣聚て生じ色バ死するふもまた陰陽

の二氣散散する事と云ふハ万物比皆始終の

猶予視と子の
猶を得不我ハ非
もたら夫二三子
也
季路鬼神ハ事
と問子曰まはく
未だ人ハ事
能ハ馬く之を能
鬼ハ事人敢て死
を問曰まはく未
生を未知焉く之
死を知ん

閔子側侍を聞
周如子路行
行如子冉有子
貢侃侃如子
樂
由若其死
然を得不

魯人長府と為
閔子騫曰く舊
貫は及之を如何
何を必らむ改め
作らん

夫人言ハ不言ハ

必らむ中と有

由之瑟奚爲丘之
門於て爲

門人子路と敬せ不
子曰まはく由ハ堂
小升る未だ室よ
入未

○閔子侍側聞聞如也子路行行如也

冉有子貢侃侃如也子樂折ふ御側あり

若由也不得其死然聖人心

○魯人爲長府此時魯の國の公財府を

閔子騫曰仍舊貫如之何何必改作

子曰夫

人不言言必有中聖人深く御林義あり夫

○子曰由之瑟奚爲於丘之門

門人不敬子路子曰由也升堂矣未

於室也

人及之深に到るげなり自余の階下より連なり

子貢問師與商也孰賢子曰過商不及師

曰然則師愈與子曰過猶不及

季氏周公富而求之為聚斂附益

吾徒也非也小子鳴鼓而攻之可也

柴也愚參也魯曾也師也辟由也嗾

回也其庶幾乎屢空

○子貢問師與商也孰賢子曰師也

過商也不及子貢常以人の器量を校し其の好なる故に此問あり師とハ子張の名にて

及子貢又曰然バ子張のが愈々や御らざる何れ及天地の道ハ中正の理に喩を貴くして

曰然則師愈與子曰過猶不

及障あり及ぶハ批し是故に過るハ及不し猶うとべしと誠し深き御答なり

○季氏富於周公而求也為之聚斂而

附益之魯の大夫季康子利を貪り周の桓政周公

吾徒也非也小子鳴鼓而攻之可也

子曰非

吾徒也小子鳴鼓而攻之可也

聖人ふりく憎むをりハ再求ハ吾徒ハ非也

鳴とあつて

○柴也愚參也魯曾也師也辟由也嗾

聖人ふりく御人を評し柴ハ御人の子羔と

直なり子羔も春土中より出る虫を殺む人の影を足

張なり高きて見識高き辟あり子路ハ勇猛にして

嗾とあつて

○子曰回也其庶幾乎屢空

又顔淵と云ふ

聖人

賜ハ命ヲ受不
て貨殖ヲ億
也ハ則ハ屢
中

の場処ノ庶人ナリ哉實ニ此人賜不受命而貨
屢ノ貧ノ空ノ過ノ一ノ也

子張善人之道
問子曰曰ハク迹
踐不亦室ノ入不

然トモ松智秀ノ人少ク事ヲ億ト也ハ
何事モ道理正シトシ中ニトシ仰ラセ

論篤是レ與レバ
君子者乎色莊
者乎

入於室ノ子張ノ問善人之道子曰不踐迹亦不
右ノ人行迹ヲ切リ踐守トリハ自然ノ理ヲ
違ル思フ也ハ御答善人ノ道トハハ見識アリトシ

子路問聞テ斯ノ
行ノ諸子曰ハハ
父兄在ト有
之ト如何ト其聞
之ト斯ノ之ト行ノ

乎ノ誠ニ交リテ必ズ心得アリ言論篤實トシテ君子ノ
人ノ表向ノ色ヲ飾リテ色合
莊トシテ人ノ誠ト見ルトシ

冉有問聞テ斯ノ
行ノ諸子曰ハハ
聞テ斯ノ之ト行ノ
公西華曰ク由ク問
聞テ斯ノ之ト行ノ諸
子曰ハハ父兄

之何其聞斯行之ノ子路ノ問ニ聞テ斯ノ行ノ諸子曰ハハ父兄在ト有ト之ト如何ト其聞ノ之ト斯ノ之ト行ノ
斯ノ行ノ之ノ義理ヲ當テハ早速ト行フ事ノ也ハ聖人御答ナリ
公西華曰ク由ク也問聞斯行之諸子曰ハハ父
兄在求也問聞斯行之諸子曰ハハ父兄在

在もく有求問
聞て斯く行へ諸
 子曰はく聞て斯
 小之を行へ赤惑へ
 敢て問子曰ま
 かく求ハ退を故
 之を進由
 人兼を故
 之を退く
 子匡は畏顔淵
 後子曰はく五
 女を以て死とし
 為曰く子在も回
 何を敢て死しん

赤也惑敢問子曰求也退故進之由也
右御登異
 兼人故退之
右御登異
 子路ハ中り人の事兼
 あり故て之を進者なり
 欲もつるの氣象あり此故に退て教へるなり
 ○子畏於匡顔淵後子曰吾以女為死
 矣曰子在回何敢死
巴の上り言如く聖人匡
 聖人の時この時を免うを去りたるの時
 顔子ハ後を去りて死す人曰はく汝ハ大に死す
 空しく死果人なり夫生死もに軽むるハ不知なり
 生むるに生て死むるも死するも君子ハ生死とも
 不義もあらず若し死すれ君父師の三つはつて奉ずるハ

季子然問仲由
 冉求ハ大臣と謂
 可與
吾子を以て異
 吾子の問と為
 曾ハら由と求與
 之問
 所謂大臣なる者
 公道を以て君事
 不可なまハ則ハ
 止

季子然問仲由冉求可謂大臣與
季子然ハ魯の大夫季氏の連子なり吾家も名高子路
 冉求の二人を臣とせりとと自斂り思ハる同奉するハ此
 二人ハ棟梁の大臣と
 子曰吾以子為異之間
聖人の仰せに今子問とてその子路
 冉求の二人を斯重く布心得る
 曾由與求之間
聖人の仰せに今子問とてその子路
 冉求の二人を斯重く布心得る
 所謂大臣者以道事君
事ハといはれ異と
 可則止
依て説のハ大臣といふるべし人ハその道を
 正して敬ふも義ハ非ざれば行ハざる君の
 則ハら官祿を去して潔白を保つるを大臣とハる
 今由與求也可謂具臣矣
今子路と冉求
 今由と求與具臣
 と謂ハ

曰く然らば則ち
之は従ふ者與

父と君與を弑する
も亦従ふ不

子路子羔を費
の宰と為使
夫人之子と賊する

家中の臣れ教ふ具べし
大臣してハナリと抑る

曰然則從之者與

季子然ハ仰せと聞て右の二人大臣とつあ者よあつてハ主人
のやめ処のやうに子従ふべし者なりやと云ふ

子曰弑父與君亦不從也 徹發此輩大臣ハ
道ハ身心は銘じて熟し其の故り或ハ君父を弑すハ
益ぐりろよまらやの事ハ徒輩ハありまらやの時ハ

死を厭じし志ざしを奪つて是ハ右季子が
ハ俗の舞雍徹の事を己が俸りて己は君をも捨つ
如き心あれば之を折らして
かくハ仰せらるるなり

○子路使子羔為費宰 子路先達て季氏
の為に費宰用られて

子曰賊夫人之

子 聖人此事且一ざる皆どのやう
如何と云ふは
一にして内は徳を積むして早く身の務りやと云ふ
或ハ

子路曰く民人有
社稷有何を必む
書を讀て然
て後學と為

是故一夫佞者
惡し

不足処を以て事よわくもハ行はぬの場も己が私を
用る事ハハナリぬ今子羔が生質殊善朴なりて字
と足む今政道よあづる事ハ金く是人の大切なる
子と賊といふ者なり子細ハ合はる事ハ強が故なり
子路曰有民人焉有社稷焉何必讀
書然後為學 子路答奉するハ聖人の仰せまに
迂て遠をこしやう鬼角空しく

何一は書を讀教を厭ふ心も必して 子曰是故
政道を學と為とせん 汗遠とせん

惡夫佞者 聖人の本意ハ凡て本を務むべし先學
下而後仕べし是義理の正しと

と沙汰の限なり夫徳ある者ハ言寡く言辭を飾者ハ

赤再ハ何如對て

曰く之を能きと

曰く非を願はくハ

馬ノ學グ宗廟

之事如ク會同

端章甫して願

ハ小相と為人

點再ハ何如瑟と

鼓と希カウ鏗

再として瑟と合

て作對て曰く三

子者之撰異

子曰ハク何

傷ム乎亦各其

志グと言也

曰く暮春ハ春

服日成冠者五

六人童子六七人

浴して舞雩

小風ト詠して歸

夫人子喟然と

して歎いて曰ま

ハ吾點に與ん

冠者男子二十小

なればえて衣服

を改め大人の

冠と着るられん

心足るに有使べし然るに徳を布祀樂を施すこと

事ハ別ニ徳ある君子を俟得て共ぐりて行べし一人の

力ハ及ぶるに

赤爾何如對曰非曰能之

願學馬宗廟之事如會同端章甫願

為小相焉

致一見人子細ハ宗廟鬼神の祭事又諸侯御會

合の時つらも大禮なりやうの節章甫の冠を戴こ

幼端の服を着る此日の物怒りて

なすんその大相の小相とつら程なりを願くハ致しん

とん聖人子路の率再と笑ふの之は依て冉求公西華

の三人遠慮をなかりて對する中より公西華ハ大自身退る

點爾何如鼓瑟希鏗爾合瑟而作對

曰異乎三子者之撰子曰何傷乎亦各

言其志也

右四人の内列席の癡を以ていも子路の次

鼓て有るを聖人先三人に及て終り曾皙に向り瑟を

引サセんとて音色も希なり鏗再とハ瑟の鳴罷ん

瑟を下へ置て座を仰て對て曰く治世の事祀樂のそハ

已に各是を述るり自己の愚識とせんとん

此三子の撰とハ異りて何の傷むる有ん

聖人曰ハク只志と述語ハ何の傷むる有ん

曰暮春

者春服既成冠者五六人童子六七

人浴乎沂風乎舞雩詠而歸夫子喟

然歎曰吾與點也

比春の衣服を着て膚薄くなり點比冠者の年五六人

童子六七人を誘引して沂水とらる川の温泉に浴して

舞雩の地の高き處へ登り歌詠を興し乘

して緩歩を歸ハ是社願志なりと述聖人之を

論語

十一

三原集官藏

十一

三原集官藏

元服よりふたり

三子者出曾皙
後曾皙曰夫
三子者之言何如

亦各其志
を言已
曰く夫子何を由
を晒

曰くはく國を為
に礼を以て其
言讓不是故
之を晒
唯求則非邦

非と與安ん方
六七十如く五六
十ふりて邦は非
ざる者を見
唯赤ハ則ハ邦に
非む與宗廟會
同諸侯は非む
して何を赤之
小と為ハ孰能
之ハ大と為

顔淵第十二
顔淵仁を問子
曰くはく已に克
礼は復ハ仁を

論語三

班固集解

誠し事業ありあづうらむとして自然に悠然の淵を兼
拔郡なり三人の小く用るを好むが故に
二三子者出曾
哲後曾皙曰夫三子者之言何如

三人ハ退出あり曾皙一人後より倣て聖人ハ御問トて曰
夫三子の者之言とら其可否何如か
子曰亦各言其志也已矣

御答別の子細は
已矣
曰夫子何を由
を晒

曰爲國以禮其言不讓是故晒之
聖人曰はく國を治るハ礼樂法度を以て治るものなれ
礼ハ人ハ讓て身を辞退するを以て兼と云今子路
國を治るの事を語て却て其言と讓るけを是故に晒くや
唯求則非邦

也與安見方六七十如五六十而非邦
也者
假令六七十里五六十里の小地なりとも
邦非となり是も亦邦を治るの志あり
唯赤則非

邦也與宗廟會同非諸侯而何赤也
爲之小孰能爲之大
宗廟會同の事ハ諸侯の事なり是も國を治るの器
量なり公西華自らいふは小相まどハ勤まらばとあり
なり然る時ハ赤が外に誰人ハ大相と
なりて其右に出るものなりと云

顔淵問仁子曰克己復禮爲仁一日克

顔淵第十二

顔淵問仁子曰克己復禮爲仁一日克

論語三 班固集解

為なり一日己も
克し礼も復つ天
下仁は歸ると仁と
為ると己は由而
て人は由乎哉

顔淵の曰く請
其目と問子曰
く礼も非ざれば
視て勿く礼も
非ざれば聴て勿

と礼も非ざれば
言て勿く礼も非
ざれば動て勿く
顔淵の曰く回不
敏と雖も
請斯語と事と
仲弓仁を問子曰
曰まはく門と出
大賓と見が如
一民を使大祭
と承が如く己を
欲せ不所人施
てんと勿く邦
在怨も無家

論語三 顔淵第十一

己復禮天下歸仁焉為仁由己而由人

乎哉 顔子は仁を行はるる所以を問奉けつる此段最要道

として過るとならず不及となく中なる節文をとり常

制あり法なり己と私の心なる人の心なり利欲の

私とハ本心の徳のあらはれをり聖人御登小常

復とハ一念の然ハ本心の仁を得たり一日も私心の

在て人よ由のとなり仁を為るなり己の心

顔淵曰請問其目子曰非禮勿視非禮

勿聽非禮勿言非禮勿動顔淵曰回

雖不敏請事斯語矣

顔子己の聖人の垂教

欲の義ハ明ら小判然今其礼復の條目と問
奉まつ御身の外を制する時ハ内なる
胸中の徳を養ふの所以なり目視耳聴口の言ハ
身の動此四ハ物よ交さハ必し心をなす
易て染るものなり故に言語行なひ一切
小葉ごとく心を決して心を動と分たす
を假令不敏なる私に奉らんとす
を身の事業と奉らんとす 請願ハ永く斯御教

○仲弓問仁子曰出門如見大賓使民

如承大祭己所不欲勿施於人在邦無

怨在家無怨仲弓曰雍雖不敏請事斯

語矣 此段聖人の仁を説くこと異なるを見よべし
仲弓もまた顔子より徳行の取人なり

論語三

十一

顔淵第十一

よ在て怨み毎一
仲弓曰く雍不
敏なりと雖も
諛斯語を事
とせん

司馬牛仁を問
子曰まはく仁者
其言詛
曰く其言詛斯
之を仁と謂乎
之を為と難し
之を言と詛

金を得平
司馬牛君子を
問子曰まはく君
子ハ憂不懼不
曰く憂不懼不
之を君子と謂
乎子曰まはく内
省して疚
不夫何を憂
何を懼ん

さして仲弓への御答ハ心の敬を第一とし右の聖人舜帝天子
とならざる時にも己が身を恭しく敬し南面して坐しぬるの
之を時言喻して之を出さざる貴重なる客賓と相接
の意を携て人の瞻視所を軽しくなすべからざる下を治め
民を御する大なる祭事ハ鬼神の事と掛り奉らるる心を
以て之れハ自然ニ身地とく不仁なることなり如此に
心廣く體も胖らふことハ中とらざる也吾心を深く
推及して之を人の心と不敬事ならざる必む人へ施及さる
は有べし家の内邦の外までも人と疑し之の怨と結と
なり是を社仁の道といふなり雍ハ仲弓の名なり

○司馬牛問仁子曰仁者其言也詛
司馬牛への御答なり汝を求んと欲せば何を仁者
為之を教ふるや仁者ハ言を恐て妄言を口より出さ
是行ひのつゝ合を曰其言也詛斯謂之仁矣
重なるが故なり
乎 詛のこして斯を仁と侍るや 子曰為之難

言之得無詛乎
より仁者ハ言を詛とらざる計を
知つて詛とらざる所以を悟得たを凡そ誰人か此心
とらざる者をとらざる故に吾意の終り任て安んずるに依て
口より出る言も肆まらず詛とかり君子ハ身の行ひ
と口の言も及ぶこととを義理と守るを以て自然
詛を言を

○司馬牛問君子子曰君子不憂不懼
司馬牛君子の道也聖人ハ曰奉らるる
御答は君子ハ心常に泰らして憂懼とは
懼斯謂之君子矣乎子曰内省不疚
夫何憂何懼 司馬牛は心疑がして此の
唯軽しく言を吐て此の本付処を悟とそれ
君子ハ是ハ義は是ハ不義と正して理の疚らざる

子貢政と問子
曰く食と足兵
と足民之を信む

子貢曰く必不得已
と得不得して去
ハ斯三者に於て
何を先とせん曰

去兵を去ん
子貢曰く必不得已
と得不得して去
此二者に於て
何を先とせん曰

去ん
自皆死有民信
毎バ立不

棘子成曰く君子
ハ質而已何を文
を以て為

子貢曰く惜乎
夫子之君子を
説駟も舌も及
不

此二條行ハ程なる遠を明

○子貢問政子曰足食足兵民信之矣

子貢政道を問奉りて聖人の御答夫國の政ハ先民
の産業不足なきことを第一とせしむるなり食は民
武成を以て法を正し其上へ文徳教化して礼義を示
人々信を抱て離叛なきや兵ハ武備の物名なり

子貢曰必不得已而去於斯三者何先

曰去兵 子貢より問奉りてハ此三ツ元より重し
若し此三ツが條をわたりて

子貢曰必不得已
御答より先兵道武備を去べし如何と問はれハ食は物
守るに堅く兵は
子貢曰必不得已

而去於斯二者何先曰去食自古皆有

死民無信不立 子貢より問此二條の内已と
得不得して去る時ハ先づ

死べし然ハ食を去る事なり死は定まらん
人日信の心を去てハ死べし
者なりと誠し聖人の信を重し此の如し

○棘子成曰君子質而已矣何以文為

衛の大夫棘子成ハ名なり君子の徳ハ生
質のや正直誠を社尊ししりて書を讀文を弄
藝は遊してハかりとヤル
是ハ當時の華美なるを疾てなり
子貢曰惜乎

夫子之説君子也駟不及舌 子貢評の如く
子成の詞の如く

夫子之説君子也駟不及舌
今子成のヤる誠もバを
語ハたり返しなしたるハ
駟の馬して追付しなしたるハ

文ハ質ハ猶
質ハ文ハ猶
虎豹之鞞
犬之鞞
羊之鞞

哀公有若
問曰年饑
用不足之
如何有若
對曰曰盍
徹乎

曰二吾猶
不足之
如何其
徹也
對曰曰
百姓足
君孰與
不足

子張德
崇惑
辨

文猶質也質猶文也虎豹之鞞猶犬

羊之鞞子貢曰君子を問ふ禮文ありて

以てたゞ若毛もたれ鞞の皮を

失あり誠の聖人の仰あり

○哀公問於有若曰年饑用不足如之

何魯の君哀公問て曰く年饑用不足

有若對曰盍徹乎有若對て曰く田地の

何其徹也哀公又曰く今迄十分の内

對曰百姓足君孰與不足有若對て

曰二吾猶不足如之十分の一を

何其徹也哀公又曰く今迄十分の内

對曰百姓足君孰與不足有若對て

對曰百姓足君孰與不足有若對て

對曰百姓足君孰與不足有若對て

對曰百姓足君孰與不足有若對て

對曰百姓足君孰與不足有若對て

○子張問崇德辨惑子張の問

積蓄如何して德の崇む小進さんや

子曰主忠信徙義崇德也

聖人對曰

厚を主として口の辞身の行しを正し信ハぬやうと義

一と一毎日日の徒らうととと義理の正しと道ハ徒行

ハ徳を崇 愛之欲其生惡之欲其死既欲

其生又欲其死是惑也

君子ハ心の置を最も

厚一禮記ヨリあり如く龍愛する中ハ其惡事ハ惡と

知るやと憎中ハ其義とハ義と知るこの故ハ物ハ

逼て安ハ輕ハ人ハ心を搦ト薄く輕く布

若く惡トあハバ其死とを欲ナリ人の生死ハ天

命の定ありて人カ及ととハありと然ハ既ハ其の

生とを欲て其死とを 誠不以富亦祇以

異此語ハ第十六篇の処りある章一と斯ハ在ハ

○齊景公問政於孔子

齊の君景公政

道の心持を聖人 孔子對曰君君臣臣父父子子

へ同奉 孔子對曰君君臣臣父父子子

聖人對て曰ハく夫國家の義とハ君の道を明に

て君と仰ふも臣ハ臣の節を守敬て職を務るべし

父ハ父の慈愛を慈と子ハ子の孝道を失ふ

べりつととと 公曰善哉信

哉信如君不君臣不臣父不父子不子

雖有粟吾得而食諸

哀公感

君も臣も父も子も其道を守らる時ハ米粟の食物あり

とも吾安穩一食も事も能やると 然も景公徒

づる聖人を尊信するの 用ひ

づる果して其の時陳氏の乱を仕出さる

忠信を主と

義も徙ハ徳と

崇まらる也

之を愛して其

生を欲し之を

惡て其死を欲

既其生を欲し

又其死を欲し是

惑也

誠以富を以て

不亦祇以て

異

齊の景公政を

孔子に問

孔子對て曰

君君臣臣

父父子子

公の曰く善哉信

哉信如君不

臣不臣父不

父子不父子

不ハ粟有と雖

も吾得て食

諸

孰敢正之

季康子盜

患孔子

對曰曰

子不欲

之賞

季康子政

孔子曰

如無道

以有

何如

孔子對

子曰

夫政の字ハ正の字の心にして即ち
子張我身を正して國家を治り道
正し之を從ふ

正し之を從ふ

○季康子患盜問於孔子孔子對曰

苟子之不欲雖賞之不竊

下見習者多矣

○季康子問政於孔子曰如殺無道

以就有道何如

孔子對曰子為

政焉用殺子欲善而民善矣君子之德

風小人之德草草上之風必偃

○子張問士何如斯可謂之達矣

子曰何哉爾所謂達者

子曰張對曰在邦必聞在家

子張對曰曰在邦必聞在家

子張對曰曰在邦必聞在家

子張對曰曰在邦必聞在家

子張對曰曰在邦必聞在家

子張對曰曰在邦必聞在家

子張對曰曰在邦必聞在家

家^カも在^アて必^キらざる

是^{コト}聞^ク也^{ナリ}達^ス非^ズ也^{ナリ}

夫^レ達^スハ質^ヲ直^ク真^ニナ^リて

善^ヲ我^ノを好^ムひ言^フを

察^シして色^ヲと觀^ス

慮^スこ^トうて以^テ

人^ノ下^ルる邦^ニ在^リ

て必^ズ達^ス家^ニ

在^リて必^ズ達^ス

夫^レ聞^ク色^ヲ仁^ニと取^リ
て行^クる違^フ之^ヲは
居^ルて疑^ハ不^レ邦^ニ

必^ズ聞^ク

子^ハ張^ハの曰^ク今^ノ邦^ニ所^ノの達^スとヤハた^ス出^テ邦^ニ在^リて

著^シ名^ヲ

子曰^ク是^レ聞^ク也^{ナリ}非^ズ達^ス也^{ナリ}

夫^レ達^ス也^{ナリ}者^{ナリ}夫^レ達^スハ質^ヲ直^ク真^ニナ^リて

質^ヲ直^ク而^{シテ}好^ム善^ヲ察^シ言^フ而^{シテ}觀^ス色^ヲ慮^ス以^テ

人^ノ在^リ邦^ニ必^ズ達^ス在^リ家^ニ必^ズ達^ス

夫^レ聞^ク色^ヲ仁^ニと取^リて行^クる違^フ之^ヲは居^ルて疑^ハ不^レ邦^ニ

夫^レ聞^ク也^{ナリ}者^{ナリ}夫^レ聞^ク色^ヲ仁^ニと取^リて行^クる違^フ之^ヲは居^ルて疑^ハ不^レ邦^ニ

色^ヲ取^リ仁^ニ而^{シテ}行^ク違^フ居^ル之^ヲ不^レ疑^ハ在^リ邦^ニ必^ズ

在^リて必^ズらざる取^リへ
家^ニ在^リて必^ズらざる

聞^ク在^リ家^ニ必^ズ聞^ク

又^ハ聞^クの道^ヲを説^キて曰^ク聞^クと表^ス

夫^レ聞^ク色^ヲ仁^ニと取^リて行^クる違^フ之^ヲは居^ルて疑^ハ不^レ邦^ニ

夫^レ聞^ク也^{ナリ}者^{ナリ}夫^レ聞^ク色^ヲ仁^ニと取^リて行^クる違^フ之^ヲは居^ルて疑^ハ不^レ邦^ニ

夫^レ聞^ク也^{ナリ}者^{ナリ}夫^レ聞^ク色^ヲ仁^ニと取^リて行^クる違^フ之^ヲは居^ルて疑^ハ不^レ邦^ニ

夫^レ聞^ク也^{ナリ}者^{ナリ}夫^レ聞^ク色^ヲ仁^ニと取^リて行^クる違^フ之^ヲは居^ルて疑^ハ不^レ邦^ニ

夫^レ聞^ク也^{ナリ}者^{ナリ}夫^レ聞^ク色^ヲ仁^ニと取^リて行^クる違^フ之^ヲは居^ルて疑^ハ不^レ邦^ニ

夫^レ聞^ク也^{ナリ}者^{ナリ}夫^レ聞^ク色^ヲ仁^ニと取^リて行^クる違^フ之^ヲは居^ルて疑^ハ不^レ邦^ニ

夫^レ聞^ク也^{ナリ}者^{ナリ}夫^レ聞^ク色^ヲ仁^ニと取^リて行^クる違^フ之^ヲは居^ルて疑^ハ不^レ邦^ニ

樊^ハ遲^ハ從^テ遊^ブ於^テ舞^臺之^下曰^ク敢^テ問^フ崇^ニ德^ヲ

子曰^ク善^シ哉^{ナリ}問^フ先^ニ得^ル非^ズ

子曰^ク善^シ哉^{ナリ}問^フ先^ニ得^ル非^ズ

子曰^ク善^シ哉^{ナリ}問^フ先^ニ得^ル非^ズ

子曰^ク善^シ哉^{ナリ}問^フ先^ニ得^ル非^ズ

子曰^ク善^シ哉^{ナリ}問^フ先^ニ得^ル非^ズ

子曰^ク善^シ哉^{ナリ}問^フ先^ニ得^ル非^ズ

子曰^ク善^シ哉^{ナリ}問^フ先^ニ得^ル非^ズ

子曰^ク善^シ哉^{ナリ}問^フ先^ニ得^ル非^ズ

子曰^ク善^シ哉^{ナリ}問^フ先^ニ得^ル非^ズ

子曰^ク善^シ哉^{ナリ}問^フ先^ニ得^ル非^ズ

子曰^ク善^シ哉^{ナリ}問^フ先^ニ得^ル非^ズ

子曰^ク善^シ哉^{ナリ}問^フ先^ニ得^ル非^ズ

子曰^ク善^シ哉^{ナリ}問^フ先^ニ得^ル非^ズ

子曰^ク善^シ哉^{ナリ}問^フ先^ニ得^ル非^ズ

子曰^ク善^シ哉^{ナリ}問^フ先^ニ得^ル非^ズ

子曰^ク善^シ哉^{ナリ}問^フ先^ニ得^ル非^ズ

子曰^ク善^シ哉^{ナリ}問^フ先^ニ得^ル非^ズ

子曰^ク善^シ哉^{ナリ}問^フ先^ニ得^ル非^ズ

子曰^ク善^シ哉^{ナリ}問^フ先^ニ得^ル非^ズ

子曰^ク善^シ哉^{ナリ}問^フ先^ニ得^ル非^ズ

子曰^ク善^シ哉^{ナリ}問^フ先^ニ得^ル非^ズ

を後よ徳と崇
むに非ど與其
惡を攻人之惡を
攻るに非ど與一
朝之非ど與一
忿其身と忘て
以て其親及惑
非ど與

樊遲仁を問子曰
を同子曰まはく
人を知

樊遲未達也未
直を擧て諸の
枉を擧て錯能枉
者直
使
樊遲退がひて子
夏を見て曰く郷
吾夫子も見て
知を問子曰まはく
直を擧て諸の
枉を擧て錯能枉
者直
使
使と何の謂ぞ

宗徳與攻其惡無攻人之惡非僞
與一朝之忿忘其身以及其親非惑
與御容凡そ人道を守り信を失はざれば
事とともを天道の眞加をせり然るは上天

又その報あつて惠と得るをなす然るは君子其
為事を先へ務めて都て其報を得るは後して心
に掛て是徳の崇峻に非ざらん又己が心を責て惡を
知り人の事を攻る事なり是僞を俗のそくに非ざらん
ゆる知の深うしめ者心寛りて理を正し能はざらん
ゆる急なる小誤をあらはれんと一朝一夕の忿を
抑ふ夫をたうざんして吾身の大事をこころし
父母祖宗の事うやまへ與及と惑とらぬ非や

樊遲問仁子曰愛人問子曰知人
樊遲の問仁なり知仁とは如何なる義を御容よ人を
愛するは仁心の施し及たる徳ある人を愛して尊ぶハ

樊遲未達

樊遲の意は通はぬ
是知を用る務なり

子曰擧直錯諸枉能使枉者直

者直重て説りあはく道ありて直なるものこと擧
用はて心ゆく狂ゆるものこと捨置べりまづ色ハ

樊遲退見子夏曰郷也吾見

於夫子而問知子曰擧直錯諸枉能使

枉者直何謂也樊遲御席をくら退てのち未

使と何の謂ぞ使と何の謂ぞ

子夏曰富哉言乎

舜天下を有る

衆を擧げて不仁者遠

湯天下を有る衆を

選で伊尹を擧げ不仁者遠

子貢友を問子

曰まほく忠告して

善之と道はく不

可からざる則ち辱

止自辱辱す

子夏曰富哉言乎

のこふいふことなり奉りて

於衆擧げ不仁者遠矣

下選於衆擧げ伊尹不仁者遠矣

聖人舜帝とて賢人を擧げ

夫より天下よく治り不仁者

賢人を用ひて天下の人民

○子貢問友子曰忠告而善道之不可

則止無自辱焉

心して互に不足を處は

忠に告るといふ相さう

愆がの心得不可して道

○曾子曰君子以文會友以友輔仁

君子の文義とのごう

さう忠を以て身を

子路第十三

子路問政子曰先之勞之

明君ハ自ら身先を

益を請曰まはく
倦と毎と

して心を驕の場、置を以て人民帰服をなすは是故に
上、志の所要、自ら身先を先とて、若勞と勤、ゆへに下
怨ひと、**請益曰無倦**、子路、敬んで承り、御
教、寡ならず、御答、倦と勿との一言を示し、子路ハ

仲弓季氏の
宰為政とを
同子曰まはく有
司と先小
過を赦賢才
を奉

勇、都た、勇氣の者、再とあま喜、
然、持と能ハ、倦と退屈、
成就をなさん、且、齊し、人とり、
人を引、**曰馬知賢才而**
人を見、然、各、其、有、司、應、
成就をなさん、且、齊し、人とり、
人を引、**曰馬知賢才而**

○仲弓為季氏宰問政子曰先有司

赦小過舉賢才
政務の事を問御答免りく

之を奉人曰まはく
再知所と奉よ
再知不所人其
舍諸

人を見、然、各、其、有、司、應、
成就をなさん、且、齊し、人とり、
人を引、**曰馬知賢才而**
人を見、然、各、其、有、司、應、
成就をなさん、且、齊し、人とり、
人を引、**曰馬知賢才而**

舉之曰舉爾所知爾所不知人其舍諸

仲弓曰然也賢才の人のあるを馬知と
得んや、**曰馬知賢才而**
得んや、**曰馬知賢才而**

類の賢者の多も、佞人の多も、必竟、
のた、**賢才を奉色バ、佞人**
のた、**賢才を奉色バ、佞人**

○子路曰衛君待子而為政子將奚先

此時、聖人、楚、
公、**子路曰、衛君待子而為政、子將奚先**
公、**子路曰、衛君待子而為政、子將奚先**

子路曰く衛の君
子と待て政とを
為バ子將奚先
と先と將

必も名と正ま乎

子路曰く是有
哉子之迂なり
奚ぞ其正さん

野あひ哉由君子
其知不所於て
蓋闕如也

名正しう不則
ら言順ハ不言
順ハ不則ら事
成不事成不則

礼樂興ら不礼
樂興ら不則ら
刑罰中ら不刑罰
中ら不則ら民
手足と措所毎

故ゆへ君子ハ之
を名して必らむ
言可之を言必む
行なふ可君子其
言不於て苟くも
ざる所毎已

子曰必也正名乎

人の服する者ならん人出公ハ父を父とせん子路曰く何の道と以て其國を治んとせんや

有是哉子之迂也奚其正

御ハ知を用ゆる何ぞ緩くせん名正をナラズん

有哉愚召の迂遠なり者なり奚ぞ子曰野哉

由也君子於其所不知蓋闕如也

聖人子路の義理の心を用ざるを野とく夫君子ハ

言不順言不順則事不成事不成則

禮樂不興禮樂不興則刑罰不中刑罰

不中則民無所措手足

出とて言所必と人ハ順べうら言所順せんハ則

樂そあけ及事 整のハ興るをかりてハ法度とて礼

人の刑罰も法の中不り 刑罰於法の中と時ハ

則ハ下小住居とる民百姓ども 故君子名之必

可言也言之必可行也君子於其言無

所苟而已矣

を正とて代となりと又ハ仇をむらやと名目暗君ハ故

對して物語も不義なりハ恥し事ハ身行ふ

言可也ハ是なりんを以て君子ハ名目と身の行ふ

所とつり合して行とたり君子の言ハ
苟なり事ハ止むり出さざるとなり

樊遲請學稼子曰吾不如老農請
學爲圃曰吾不如老圃

樊遲稼と學を
請子曰まはく吾
老農も如不圃
爲と學んと請
曰まはく吾老圃
小如不

圃ハ菜蔬やりの青物を植るとなり
樊遲出

子曰小人哉樊須也
樊遲暫ありて退出あり

上好禮則民莫敢不敬上好義則民莫
敢不服上好信則民莫敢不用情夫

如くは則四方之民其子
を襁負して至
る焉くんぞ稼と
用人

好めば則ハ一民
敢て情とを用
ふ不と莫夫是の
如くは則ハ

然るに樊遲疑をりてさすの坊に至る故聖人の一隅を
挙るの御教及ぶるこの故なりや老圃老農を

尋るやの事してハ弥真實を失ふ事と恐るして
他人へかく示りたり心を上る者礼法を好む時ハ上

を載くの下のたれば敬意を抱く者なり若しこ義
として所事の宜さふらなりとを好む下民心服せざる

者なりやと法令を出し下を察し信實の不達
を主とるは下民のもの情を用ひざる者なり是に

施し行なうの時四方の人民帰服して子を北に襁負
たがて来至る何ぞ老農老圃の稼を學て後國を治る

事を用人
やとなり

子曰誦詩三百授之以政不達使於

詩三百と誦之
小授に政を
以て達せ不四方に

論語三

三十一

三十一

使して專對
能ハ不多
雖も亦何と以て
為

其身正
令セ不して行
其身正
不バ令と雖も
從ハ不

魯衛之政
兄弟也

子衛の公子
謂く善室
始有少曰く苟
合矣少く有少
く苟り完く富
有に曰く苟
美なり

四方不能專對雖多亦奚以為

此段詩經の徳と並り學問の法日用の事行なふべきと論じのふれ詩ハ人情に通じ物の名をきり世の盛衰政との得失を見らる徳ハ温厚和平を言語に達せざる然る徒に學て文字を詭弄の輩ハ假令詩三百篇及く誦しやうとも政務を授けりて事小達せ不四方へ君の命を以てしその意達せら大節なる事臨幾應變して專對の事能はざるハ誠の益なりこりふべしと云ふは假令多く學とうとも奚以為と仰らる

子曰其身正不令而行其身不正雖

令不從
今不從
今不從
今不從

子曰魯衛之政兄弟也

魯衛の國ハ康叔の後胤なり兩國とも先祖兄弟の國なり今天下地とて政道廢て淺間しく中にも魯衛兩國ハ政事の衰やても相似る事兄弟のどと嘆息遊されしなり

子謂衛公子荆善居室始有曰苟合

矣少有曰苟完矣富有曰苟美矣

公子荆ハ衛の大夫なりその人々金銀奢侈の心より流むと足とを知てよく室を齎しとを評し多の之常人通用のそらよりやりの身なれば始より十分なる事を好むと公子荆の室を治るに器物の物始て有と云ふハ敬り同く合はしむるなり然るに公子荆の曰やう時他人なれば奢侈をさへらる

子衛適冉有僕庶哉

冉有曰既庶又何加

曰既富又曰既庶又何加

苟完之其於上之謂也富之時也他人之善美を盡して之を却て公孫荊ハ苟り美を驕り事は是れを仰る

○子適衛冉有僕聖人衛の國へ至りて此日冉有御僕なり

子曰庶矣哉聖人御車より衛の人民の多くあるを見渡して曰く

既庶矣又何加焉曰富之冉有の曰く既庶の百姓人民

曰既富矣又冉有曰く既富の百姓人民

何加焉曰教之冉有曰く既富の百姓人民

教者一は徳のなり既のゆゑに食に事のわくことなるを人々毎事とすものなり志するに人々生てのありて道をまきびざれば強いのハ弱さのものをくめ男女の礼もさうく禽獸のさうさういふをくを依て教を施す備はりとのありのなり

○子曰苟有用我者其月而已可也

三年有成聖人衛に居りての時衛國の民悦んで居りて居りて小衛の君靈公遂に

子曰善人爲邦百年亦可以勝殘去殺矣誠哉是言也是ハ古語なり言ハ九

殺矣誠哉是言也是ハ古語なり言ハ九

苟に我を用ゆる者有ハ基月已可也

善人邦を爲る百年亦以て殘を勝殺を去可也誠

如王者有必世而後仁

志ある一二年を経あひて、邦奸なる事ハ絶らるべし。凡そ百年をくわうも、續きよむハ國風大ニ宜くよこ政道ニ至るべし。然バ殘暴なる風俗ハ、せうりて甚し。殺刑も有やどと誠小も是言の如く、と仰せらる。大徳の天子ハ、堯舜の如く、取王人あり、必て三十年をくわうにして、天下殘りく仁政行とくべし。三十年を一世とらふ世ふして、仁なるハ是なり。

苟其身正、於從政乎何有、不能正其身、如正人何

○子曰苟正其身矣。於從政乎何有。不能正其身、如正人何。理を悟得ば、曲る者に曲を用ひ直ならず中へ曲る者を入らる。夫政道の政の字ハ正の字のくわう、たゞととなり苟に己が身を正して政道ニ臨と何の難きとるなり。若其身を正と能ハば如何も人を正とすべし。

冉有朝、退、子曰、何晏也、對曰、有政、事多如政、雖不吾以、吾其之也、與

○冉有退朝。子曰：何晏也。對曰：有政。事多如政，雖不吾以，吾其之也，與。冉有朝して、或曰冉有朝廷の勤めりて、晏く退出たり。聖人御尋に何故、是女、冉有答て政務の事あり、聖人す曰、其ハ季氏が家の務、國人の政務ハ是私、臣とらるべし。必と大夫と相謀とて公事とらり。政道ナバ假令吾用られむと、吾もまゝ大夫ナレバ與、聞の理なり。

定公問一言以て、有諸孔子對曰、言不可、以若其幾也

○定公問：一言而可以興邦，有諸？孔子對曰：言不可，以若其幾也。定公問一言にして、有諸孔子對て曰、言不可、以若其幾也。是の若く其幾と可う不

人之言曰君為之難臣為之易不

如君為之難也知一言而興邦

曰一言而喪邦有諸孔子對曰

不人之言曰予君為之樂也唯其言而莫之違也

定公或曰聖人への御話は邦を引興し心持し一言一句の妙語を承りて有諸いふとたり耶王人對のふ

小ハ如是は一言の短きを以て其幾ある可く不且益かき事ありん

君難為臣不易 當時人への言ふも君と為ると

如知為君之難也不幾乎一言而興邦

乎 如君と為てハ其行ハ容易ナリと敬て政道と取

曰一言而喪邦有諸孔子

對曰言不可以若是其幾也人之言曰

予無樂乎為君唯其言而莫予違也

定公や呼て曰く一言ハ一邦を喪の理あり諸と

聖人の御答人の言つてハ予地の人の上にたつて

君といつてと樂も思ひも唯言つて及よの權威

小やうせてよく行され誰りて違背とせしむ

君とあり人の詞のよ 如其善而莫之違也

不亦善乎如不善而莫之違也不幾乎

一言而喪邦乎 右の語を判斷するに

義ハ人への服する處と善ともいふべし若

や權威小やうせて不善ともいふ人へ地をれて違背

在之違の一言とく邦を喪とふありん

葉公問政子曰近者説遠者來

葉の國の公や政務の本意を問ふ聖人の御答

子夏曰父の宰

と為て政と問子

曰まはく速うた

を欲するを毎

小利と見ると毎

速うたんと欲

ハ則ち達せ不

利を見れば則

大事成不

葉公孔子小語

曰く吾黨の躬

直くもる者有

其父羊と攘而

て子之を證

孔子曰まはく吾黨

其風俗を傳へけバ遠りの心をくまひて来服

○子夏為莒父宰問政子曰無欲速無

見小利欲速則不達見小利則大事不

成子夏曰父の宰と問て政務のよくを問ひ奉りつる御答の速く成就を欲べし

必と次第を定め極て大事をさううして成就

○葉公語孔子曰吾黨有直躬者其

父攘羊而子證之葉公の語の語は吾黨の

孔子曰吾黨

之直者異於是父為子隱子為父隱直

在其中矣聖人の御對は吾黨の直くして

為の隱子父の

の為の隱も直

樊遲問仁子曰居處恭執事敬與人

忠雖之夷狄不可棄也樊遲仁の問を問ひ

恭と重し物に交りつる時常に身を居の処と

國をさへいさるの賤をさうらふ固く守りて棄失

○子貢問曰何如斯可謂之士矣子曰

如斯可謂之士

士と謂可子曰

曰く己と行きたるに恥有四方に使用君命と辱しめ不士と謂可

曰く敢て其次と問曰まはく言必信と信あり行まひ必らぎ果と硜然

曰く今之政どに從ぐ者何如子曰まはく噫斗筭之人何ぞ算も小足らん

中行を得て之と與セ不バ必らぎ狂狷乎狂者ハ進んで取捐者ハ為不所有

行己有恥使於四方不辱君命可謂士

矣子貢の問に答へて士と云ふは御答に

事ハ耻なりとみまはれざるを君の爲に四方へ使をせしむ

曰敢問其次曰宗族

稱孝馬郷黨稱弟馬その次に人柄は

曰敢問其次曰言必信行必

果硜然小人哉抑亦可以爲次矣

曰今之從政者何

如子曰噫斗筭之人何足算也子の言又曰

狂者進取狷者有所不爲也聖人の言

中庸の庸の人を得て地へ導きしむる狂者

知志高き心を取りつと進みしむる狂者と

人の振揚るべき志を以て道に進むる能は

篤実謹厚の人ありし後

論語三

玉藻集解

三十一

論語三

玉藻集解

南人言有曰く人
と一して恒無は以て
巫醫と作可
不善夫

其徳も恒小セ
不或ハ之ハ羞
承じ子曰まハク
占まハ不而已

君子ハ和して同セ
不小人ハ同して和
セ不

子貢問て曰く郷
人皆之を好セバ
何如子曰まハク未
可ナク未郷人皆
之を惡まハ何如
子曰まハク未可
ナク未郷人之善
者ハ之を好し其
善不者ハ之を惡
む如不

論語三

○子曰南人有言曰人而無恒不可以

作巫醫善夫南人の人常く口癖に言はく心

を執守つての如く行ひをたつとめれば巫祝医家の如く

役も作べうらばなう医者ハ人の命を寄るその如く

巫祝ハ神に中ぐり人の為事祈るのなりたとへバ

常小つとめどしてハ人く頼よむるなりか 聖人の

言と善矣と **不恒其徳或承之羞子曰不**

占而已矣 人恒く大まは徳を以て行はざる

ハ自然と身の上よりまざるなり人より羞を承り

あつてのべしとて聖人よりみて父の辞を引て曰まは若

その理を知りてハ占を玩めざる 占を知りて

なりハ恒は身を洗とめどしてハ羞を取といふことを悟る

べし恒たるその羞をとるハ 占まハ不といふ而已矣

○子曰君子和而不同小人同而不和

君子の徳といふハ親と和してのこころなり 同は徒黨

つとて之を耻とせ小人の不徳たるといふもそれとて

○子貢問曰郷人皆好之何如子曰未

可也郷人皆惡之何如子曰未可也不

如郷人之善者好之其不善者惡之

子貢の問に凡そ郷人の如くものなり好人は稱

ありたりハ如何とて御發し惡しき事してハなれ今ハ

未可也なりまは郷中比白に惡くハ如何とて御發

それ十分なるは何れも善惡とてなりなり願くハ

郷人の善者ハ好とせ悪しき事ハ惡しき事なり

論語三

三十三

玉藻集官載

君子ハ事易シテ 説バ難シ之ヲ 説ハシテ道ヲ以テ 人トバシテ不其 人ト使フ及んで 之ヲ器トシ小 人ハ事ハ難シテ 説バ易シ之ヲ 説ハシテ道ヲ以テ 木ト雖モ説フ 其人ヲ使フ及んで 備ハシテ求ム 君子ハ泰クシテ 驕ラ不小人ハ驕テ 泰クナラ不

剛毅木訥仁近

子路問曰何如斯可謂之士 切切惔惔怡怡如 朋友兄弟怡怡

○子曰君子易事而難説也。説之不 以道不説也。及其使人也器之。小人難 事而易説也。説之雖不以道。説也。及其 使人也求備焉。君子小人の交接と説のつよ己が 身正しくあるが君子にハ事ヤド

○子曰君子泰而不驕。小人驕而不泰。毎く君子小人をさへ謙るる君子と小人とハ其躬行 かつもくはらなるこの心ハ君子と小人ハ常にさへ道を 道によすこのゆへは容貞心も泰然として驕矜なきを といはれりや小人ハ常にさへ利欲によするゆへに ありひやうにハ泰然 なる事 ちりごとく

○子曰剛毅木訥仁近。剛毅といふハ欲し 屈さぬなり木とハ今世のふんにさへさへ木石 のゆへなりとらむことと訥とハ言むに寡なることなり 此の四つものハ那め心なり 直なる所ぞ仁に近

○子路問曰何如斯可謂之士矣。子曰 切切惔惔怡怡如也。可謂士矣。朋友切 切惔惔兄弟怡怡。子路の問なり 何如たるや 御答朋友の 士とらむことなり

交ハ切切と心を通し、懇に人のあやうくと算を徳徳とハ勸めどげましむるやう、朋友に字同の志、くをを尊しとん兄弟の交りにハ怡怡、容顔して肝要なれいんとたるは肉縁ハ恩義を賊ハざるを重とん朋友ハ礼義と信のちを

善人、民を教ゆる
七年亦以て
戎、即可

○子曰善人教民七年亦可以即戎矣

教へ不民と以て
戦ハハい是之
と棄と謂

○子曰以不教民戰是謂棄之

今やて民は孝弟の道をも、子び可し、且税欽、びるさるさの筒条ありて自然に忠を懐くのみを、敗をさるさる、心得もなく、教ふる民を用て戦ハ果して

憲問第十四
憲恥を問子曰

憲問第十四

邦道有、
穀、邦道無、
穀、恥也

憲問、子曰邦有道穀邦無道穀恥也、御、人、字、ハ、原、思、名、を、憲、と、り、人、の、問、か、り、御、答、也、危、て、世、澁、や、邦、道、あ、る、時、ハ、人、は、人、は、官、祿、に

在、り、の、ち、世、を、非、に、に、う、さ、る、と、な、り、て、叶、さ、る、ハ、極、て、利、欲、た、る、も、是、非、に、に、う、さ、る、と、な、り、て、叶、さ、る、これ、を、耻、し、む、り、と、し、此、理、を、以、て、地、を、時、ハ、小、敵、身、が、厚、く、な、り、り、の、ハ、む、ひ、る、の、

○克伐怨欲不行焉可以為仁矣

憲、ち、自、躬、常、に、行、な、ら、ず、を、以、て、仁、の、道、を、問、奉、り、なり、克、と、り、ハ、人、は、勝、て、上、と、し、人、を、殺、さ、ら、ず、伐、と、ハ、人、は、り、高、ち、な、り、怨、と、ハ、心、よ、う、く、と、し、欲、と、ハ、ち、な、り、心、な、り、の、四、と、行、ハ、さ、る、時、ハ、仁、と、な、り、

克伐怨欲行、
也、不、以、て、仁、と、為、
可

人徳を尚ぶ哉
若のごと人

君子よして不仁
なる者有ん夫
未だ小人よして
仁なる者有未

之を愛して能
勞する勿ん乎
忠よして能誨
と勿らん乎
命を爲すに裨
諫之を草創し
世叔之を討論し
行人子羽之を脩
飾し東里の子
産之を潤色と

論語三

人なり。身とつる人ハ陸地ノ船をめぐりト。墨勇ガの
人なり。二人もに然るる死去を得ざる。一も古ノ禹
王ハ天下の洪水を治め手足に血を流して安座
をもちたる。又同一代ノ后稷ハ五穀を種とを司りて
民の爲に身を盡し。禹王ハ舜帝の弟たり。天下
を分けさせし。后稷ハ其子孫武王よりして天下をたり
たり。今この南容が同ハ心より、邦と邦と當時の力を
ふるふ。權門はたとへ禹王后稷を聖人よりして誠。世に
功徳ある。御方ハ皆若し。仁心なる。仁心なる。仁心なる。
偽て聖人登り。南容も。南容も。南容も。南容も。南容も。
若し。若し。若し。若し。若し。若し。若し。若し。若し。若し。
若し。若し。若し。若し。若し。若し。若し。若し。若し。若し。

○子曰。君子而不仁者有矣。夫未有小
人而仁者也。
君子元より徳を尚む。然るも仁ハ
天理の純一たるもの。毫の私
とらふ欲や。小人ハ始より本心の徳
なき者有と。小人ハ始より本心の徳

元より
仁あり
○子曰。愛之能勿勞乎。忠焉能勿誨
乎。
子を愛するにハ。學問を。務む。君に忠する
に。諫言を奉つ。愛するに。君に忠する
に。君を忠告する。君を忠告する。君を忠告する。

○子曰。爲命。裨諫。草創之。世叔討論
之。行人子羽脩飾之。東里子産潤色
之。
命の詞の文章。他所へ使者を出し。時節を
其。文備は。その理精密なる。命ハ上より
命。始て草創をなす。世叔ハ命ハ上より
命。始て草創をなす。世叔ハ命ハ上より

命ハ上より
命。始て草創をなす。世叔ハ命ハ上より
命。始て草創をなす。世叔ハ命ハ上より
命。始て草創をなす。世叔ハ命ハ上より
命。始て草創をなす。世叔ハ命ハ上より
命。始て草創をなす。世叔ハ命ハ上より
命。始て草創をなす。世叔ハ命ハ上より
命。始て草創をなす。世叔ハ命ハ上より
命。始て草創をなす。世叔ハ命ハ上より
命。始て草創をなす。世叔ハ命ハ上より
命。始て草創をなす。世叔ハ命ハ上より

子西のやうに右やうにとつてのひきつら上をさうして率の光
を施し十分の潤色さを備ふハ子産のやうに行人ハ
使官の城下なり
子産の城下なり

或ひと子産と問
子曰まはく惠人也

○或問子産子曰惠人也

或人子産のひきつらと問御答に子産のひきつらハ
人を惠とりありのなる惠と人を愛する事と厚とのへども
之を寛大に施し賜ふ事と能く孟子に委細なるは
略しぬ今の世より人君とありて学問をこのまゝに
待の人も異なり品をやりつる僅に孝心なるのあり
一兩人をとりと褒美しつるありハ振気ありて文学
を好む習りの何の徳行もなれりのをあげつるの
さうの時のくせとして下なるものハ珍しきことにあめ奉
つるこれを儒家者流の道とありて國家の政務に於
て必ず大功徳たるものなりえようありきとありてハ
るんれども君主となつて死民に恩沢あまのしつるの
ふありはあや中華として孝廉賢良等の名目にて

子西を問曰ま
はく彼哉彼哉

上の例とどうなりと一誤なり分て 天朝ハ
中華の法の用きと事どもあり必きありきハ
あつたのやうに孟子に問子西曰彼哉
子莫の中と説きつる考べし

彼哉 子西ハ楚國の公子名ハ申とありて御答
ハ彼を何とやとやと二度低りきハその
人をとりつるハさうなつて賢者のあつて政務ととも
改めらるしなれども善人を必し移さるしと謙を
遂に禍を引出せり

問管仲曰人也
管仲の同曰まハ
人ひと伯氏の
駢邑三百と奪
疏食と飯一齒
を没して怨言無

奪伯氏駢邑三百飯疏食没齒無

怨言 管仲ハ齊公を遂に覇者と仰せり人なり
諸葛孔明も羨む人なり史記又通俗の
書ハ人ハ政務をとりて同ト大夫伯氏の領分駢邑と
この人も政務をとりて同ト大夫伯氏の領分駢邑と

りふ処を没収し伯氏にハ一生入るに齒没
さうくも怨むる言わらうと巴罪をさうして管仲を

貧乏あつて怨む
無ハ難一富で驕
ろく無ハ易

孟公綽趙魏の老
と為ハ優たつて
以て滕薛の大夫
と為可く不

子路成人を問ふ
曰まはく臧武仲
之知公綽之不欲

下莊子之勇冉求
之藝の若く之を
文た礼樂を以て
セハ亦以て成人と
為可く

不仁たつとち三百八民家三百戸のところに中華してハ
家數を下ろすやうに三百戸をば郡の小と城下たり人

○子曰負而無怨難富而無驕易

人の心やうに身やうに困るうに時ハ終ぐい求て
怨の心やうにハさうに身やうに富て不自由なるの
身ハやうに驕侈をなすのたうに富るに貧窮ハ
て節操をのこすやうに致せし富て礼を好ハ易

○子曰孟公綽為趙魏老則優不可以

為滕薛大夫 孟公綽の人ハ論ハ

ゆへ國の稱垂ともたつて同優と趙魏の國の大老とハ
やうにさう何れと小また藤薛も國の政務ハ
ボの發する処なりて

○子路問成人子曰若臧武仲之知公

綽之不欲下莊子之勇冉求之藝

之以禮樂亦可以為成人矣

成人ハその徳ふくなくたうにして金く成いさう人たう
子路の問うつものたうを成人とりあべしや御答す莊

勇と武仲が知と公綽が私欲の心たうに冉求が諸
藝に達しつとたうをの四ツをのりて兼てその上り

成樂の文華を施さバ 曰今之成人者何必

然見利思義見危授命久要不忘平生

之言亦可以為成人矣 又説で曰まはく今の世

求め何と今の成人ハ何必し然あ人や大ての富祿
金銀何と今身の利欲ならしに逢てハ必き義ら

不義あとのんがへまて君のこしに就てハ命を危る小授
年久く約束要さるとハ信を以て平生の言を忘る違

成人の次とならば

○子問公叔文子於公明賈曰信乎夫

子不言不笑不取乎衛の大夫公叔文子ハ各

公明賈對曰曰公明賈ハ衛の大夫公叔文子の事ハ

以て告る者過也夫子

然して後言人

其言と厭不樂

人其笑を厭

不義して然

後取人其取を

厭不三曰公明賈對奉すつゝハ

其然らん豈其然

然豈其然乎公明賈對奉すつゝハ

時然後言人不厭其言樂然後笑人不

厭其笑義然後取人不厭其取子曰其

然豈其然乎公明賈對奉すつゝハ

笑をかくむその故り人くその笑し厭と又心義不

義と正して然後取るものを取るの故り人くその

常の人の行なりとて誠しその然るハ且たり然れ

然も諷もなき徒黨を

○子曰臧武仲以防求為後於魯曰雖

曰不要君吾不信也聖人武仲を論

て救領を奔出邦の國又防の城下に人

以て魯の君何と家嗣を乞ふ人

に身を避たより吾後辭を乞ふ身

毎うろに不信とぞのうろにや

吾もろに不信とぞのうろにや

らん乎

臧武仲防を以て

後を魯に為る

とを求む君と要

不と曰と雖と吾

ハ信せ不

論語

子貢曰管仲ハ

仁者非也與桓公

公子糾を殺して死

せんと能はず之

を相く

管仲桓公と相て

諸侯を覇とす

とて天下を匡と

民今よ到て其賜

の受管仲

人ハ吾其髪と被

し社と左とせん

豈匹夫匹婦之諒

と為溝瀆と自

經して之を知と

莫が若くならん

會合をとりて政道を正し天子を守護し奉つて遂に桓公を覇者と仰ぐ一ひと管仲一人のみならず聖人御答の意ハ如くならず管仲の如くは仁を以て余人よたつべし管仲の仁は如くは

○子貢曰管仲非仁者與桓公殺公

子糾不能死又相之

子貢の問も右に同じく管仲の如くは仁ならず

子曰管仲相桓公覇諸侯匡天下

民到于今受其賜微管仲吾其被

髪左社矣

聖人先づ義は死せざることを心とし

て桓公天下を正し天子を守護し奉つた

下ハ万民を安穩ならしむ又他の覇者とちが

て管仲に相て正しうぬれ未だ桓公に相て

小義なり微して聖人より小義を以て管仲が死

に大功ありと消は甚しきことにして御答にも

右管仲ハ天下を匡し夷狄を畏服せしめ天下の風俗

を正し今世までも管仲の賜を受たりとの

匹夫匹婦之為諒也自經於溝瀆而莫

之知也

管仲の如く大功をたらし人よ對して先づ

匹婦の小諒を以て自經して溝瀆へたされん人も

莫知夫夫婦の義理をとげんとぞんやと

仰らるる一〇右子路子貢の論ハせひは管仲とと
 ざらん誠と聖人の教の正しき妙をさるるなり又管仲
 の天子をいふは天下を匡の大功を徳と稱ふ事の
 ざりて聖人の也とめしとす仁者なりとゆふは
 これもさるる妙なりり天朝の律令を以て正さば
 たといふやその大功をなすは天子の徳也
 して人よあはれとす聖人の捨たざる事なり
 其の時天下の諸侯は周室の天子をたつて
 正しに管仲がかりて匡公とす天子をいふは天下と
 正しに管仲がかりて匡公とす天子をいふは天下と
 獨夫の論とハ人より上なりと云

公叔文子之臣大夫
 僕文子與同升
 諸公より升

○公叔文子之臣大夫僕與文子同升
 諸公自躬の御内は名ハ僕といふ者さるる徳
 昇者なり自躬衛の君よその同升位を
 獨夫の論とハ人より上なりと云

子之を聞て曰ま
 く以て文と為可

子聞之
 朝廷へ出仕する時もなすべし行いと云
 誠り常人のさるる行いと難と云

子衛の靈公之無
 道なると言まふ
 康子曰く夫是の
 如く美を喪び
 孔子曰まはく仲叔
 圍ハ賓客と治め
 祝鮀ハ宗廟と治め
 王孫賈ハ軍旅と

曰可以為文矣
 公叔文子と云ふは死後にしてその人の徳よりして
 名はけり今にして改名なり諡名の法なり
 理に背れども章よりたゞ徳あるを文といふなり

○子言衛靈公之無道也康子曰夫
 如是美而不喪
 事ハ二の卷より云ふ康子かゝる言はるるに在りて曰く無道
 ならずと是の如くなるに美ゆは身と喪なりめつる

孔子曰仲叔圍治賓客祝鮀治
 宗廟王孫賈治軍旅夫如是美其喪

治む夫是の如く
奚ぞ其惑じん

其言を不作則
其言を為と難

陳成子簡公を
弑し孔子沐浴
て朝し哀公を告
て曰まはく陳恒
其君を弑し請
之を討ん

公の曰く夫三子に
告よ孔子曰まはく
吾大夫之後は徒
を以て敢て
告よ

三子小之して告可
不孔子曰まはく吾
大夫之後は徒が
を以て敢て告不
はあ不

聖人仰つてハ靈公の行たるの如く
所以ハ賢徳の臣下三人あるゆへに
仲叔圍ハ他國乃
其義ハあづかる事の事ハと司
軍兵の旅を司るの如く
誠ヨリ國家を治るハ賢人を引
○子曰其言之不作則爲之也難

夫口には義を言とせしむるは
依て言と作りしむるハ本より
○陳成子弑簡公孔子沐浴而朝告
於哀公曰陳恒弑其君請討之
齊の大夫陳成子その主君簡公を弑し奉りて
聖人それと聞めしめて誠ヨリ
以て身と清め朝に
告りて曰まはく陳恒今己が君を弑し奉りて

願はくハ討んと
公曰告夫三子孔子曰以

吾從大夫之後不敢不告也君曰是

三子者
孟孫叔孫也告て然るべし

の三子ハ不忠の臣にして
人との道をあきらむる
之三子告不可孔子

曰以吾從大夫之後不敢不告也

聖人遂り三子小之して陳恒を討
のの不可ざるは聖人も右三家の
曰まはく吾大夫の後席はあざかる
復義をかりしむるは

子路君は事

と曰子曰まぐ
欺りく勿し而
して之を犯せ

君子ハ上達も小
人ハ下達も

古一之學者ハ
己が為ふも今之
學者ハ人の為
ふも

告不して叶ハ
ざるなりとぞ

○子路問事君子曰勿欺也而犯之

子路の問はるる事ハつりて天道の公をまりて義と不義
とを正まざるゆへに次第に徳上をさうへ達するなり小人ハ
私の欲とりあ者にたつて己が心より勝しあへハど
制しとめざるがゆへに次第に徳下をさうへ達するなり

○子曰君子上達小人下達

○子曰古之學者為己今之學者為
人

後世の世は人心軽薄にかりて誠すく昔に及ハ
ざる哉と歎息しうふなり古之學問とよする者ハ

專ら己の徳を妍人為るるなり今人の
學問とならんはりつり世は誇人の聞へ名の為る
者なり其心りいと

○蘧伯玉使人於孔子

ある御人なりある曰伯玉より聖人へ
時節のうらひは使の人をさるるセルる

孔子與之
坐而問焉曰夫子何為對曰夫子欲寡

其過而未能也使者出子曰使乎使
乎

聖人使者と對坐ありて使者へ問ふ
て曰はく其えの主君伯玉夫子ハ常
に何れを心
ふけ為ひのや使者ある奉りつりハ主人常に
ハ過とらたふとらハいふ者賢者ふて不徳
のりふてもあり戒むべきとらつて過のせあり
寡さうの心けられ然も未ふその能也

蘧伯玉人孔子

孔子之坐と與
て而して曰ま

はく夫子何を
為對て曰く夫子
其過まら寡る

ハ不使者出子曰
使乎使乎

啓くそのうち礼義根を以て使者を遣はして其の跡を以て聖人の心あり誠として主人徳あり其使者も又使はるる乎と再びをめり

○子曰不在其位不謀其政 （孔子の位に在らざるは謀らざる）

○曾子曰君子思不出其位 （君子の思は己の位に止る）

○子曰君子恥其言而過其行 （君子は言を恥ぢて行は過す）

○子曰君子道者三我無能焉 （君子の道は三つあり我に乏し）

○子曰知者不惑勇者不懼 （知者は惑はざり勇者は懼はざり）

○子曰夫自道也 （孔子は自ら道を言ふ）

○子曰賜也賢乎哉夫我 （孔子は賜に賢い乎と問ふ）

其位に在らざるは謀らざる
曾子の曰く君子は思は其位より出さず
君子は其言を恥じて其行を過さず
君子の道は三つあり我に乏し
無能なること無仁者

ハ鳥愛不知者惑
ハ下勇者懼不

子貢曰く夫子自道

子貢人を方と
子曰はく賜ハ賢乎乎哉夫我ハ則ハ暇

あは不

我は心あり能はざるものなり三つは天命の理をささぐ私欲の心なきれば心はよくささぐなり又物の理は定まりありあることと知は心の惑はざり又今日子貢

子曰夫自道也 （孔子は自ら道を言ふ）

子曰賜也賢乎哉夫我 （孔子は賜に賢い乎と問ふ）

則不暇 （孔子は賜に賢い乎と問ふ）

人之己と知不を
患不其不能と
患

詐しうと逆へ不
不信を億ら不
抑亦先覺者
是賢乎

微生畝孔子小
謂て曰く丘何
為是栖栖者
者與乃ら佞と

為と無乎

孔子曰まはく敢
て佞を為よ非
と固と疾む

驥ハ其カと稱と
不其徳と稱と

○子曰不患人之不已知患其不能也
人より己が徳あることと知れぬことを患むことより己の徳を修めざることを患むことの方が尤も大事なり

○子曰不逆詐不億不信抑亦先覺者
是賢乎
詐は偽り、億は推して知る、信は信用、抑亦先覺者は抑も先覺者なり

○微生畝謂孔子曰丘何為是栖栖者
與無乃為佞乎
微生畝は微生高の子なり、謂はば言ふ、栖栖はさまよふこと、佞は巧言令色を以て人を惑はすことなり

孔子曰非敢為佞也疾固也
の御徳はつられて何となく戒禁の御徳はつられて何となく疾固は疾むことなり

○子曰驥不稱其力稱其徳也
驥は馬なり、力は力なり、徳は徳なり、驥は力に稱するが如く、人は徳に稱するべし

驥とりのふりのハたがあらうと稱べさるるもあらはりし
その徳あるをあらわすなりとわらうのうすむ 赫愈のふみハ
天朝のいけむき 磔墨のたぐひ徒よかあるのをなすはよく
人よ功をたかきしめその徳ありきとハ人よ才智ありきも
徳行の務なりハ豈
稱まらぬや

或曰以德報怨何如 人の我をみし
ある人の中ハ今

子曰何以報 徳の義理の中庸ととる

徳 御答ふよりとらふ 恐くハ義理の中庸ととる

以直報怨 以徳報徳 然ハ

怨に相對するハ正直を用ゆ 心の心かきさけり

同く徳を以て 徳をうけりハ

或曰の曰く徳と

以て怨む報ハ

何如

何を以て徳

報らん

直を以て怨む

報ハ徳を以て徳

報ハ

我と知と莫らん

子貢曰く何為ぞ

其子と知と莫らん

子曰まハ天と怨

と不人を尤め不

下學して上達

我と知者ハ其天乎

子曰莫我知也夫 聖人のあふハ心の心を

子曰何為其莫知子也子 世に知りの莫夫と子貢の

曰不然天不尤人下學而上達知我者 心を引きし

其天乎 子貢之を問て何為にハののハ天下聖人

曰ハ誠ハ人間あるハ徳大なりハ人の徳を

然ハ天道ハ時節あり人道ハ困塞困興ハ

怨むことたりた人用るの時ハ人々を

上ハ天道自然の理ハ達とハ只ハ場の場所ハ

我をよ明察するハ上天の外ハ知るべき者ハ

公伯寮子路と李
孫と懇と子服
景伯以て告曰く
夫子固とに公伯
寮も惑志有吾
から猶能諸を
市朝と肆とん

道之將と行と
と將與命也道
之將と廢んと將
與命也公伯寮
其命と如何

賢者ハ世と辟

其次ハ地と辟
其次ハ色と辟
其次ハ言と辟

作者七人

公伯寮懇子路於季孫子服景伯
以告曰夫子固有惑志於公伯寮吾乃
猶能肆諸市朝

子曰道之將行
也與命也道之將廢也與命也公伯
寮其如命何

子曰賢者辟世
其次辟地
其次辟色

子曰作者七人矣

子路石門宿を
晨門の曰く奚
自ぞ子路曰く
孔子自曰く是
其不可と知て之
を為者與

子磬と衛小擊
貴と荷て孔氏

之門を過る者有
曰く心有哉磬と
擊乎

既して曰く鄙
ひ哉磬乎して
己と知く莫斯已
而已深けれハ則
ハら厲し浅けき
ハ則ハら掲を

うごかうふとて七人たり作の字ハ
その気味色相とて作ると心なる

○子路宿於石門晨門曰奚自子路
曰自孔氏曰是知其不可而為之者與

その時取王人天下を周流うふ御人子路從ひ奉
まつるこのころハ子路一人とて石門とて宿
せり晨門の役人可なりハ奚自とて人ぞ子路とて
孔氏より来り人のなり晨門とて曰くこの人ハ今
世ハ教誨どの用不可とてつとて世を去るこれと為
りんと祿がふがくなくんと譏る晨門とハその宿の門を
守て晨門に啓やくとてこの者ハ定て賢者にて
世の濁るものゝ身をわくくるとて賢者にて
の御仁心厚きといひたりとなく天下小めぐ
施と小時節あるなりとてありとありと

○子擊磬於衛有荷貴而過孔氏

之門者曰有心哉擊磬乎

聖人衛の國に居りある時樂のつとに磬とて
擊てたのつとを折る貴を荷て門前を過る
あつこれ賢人のありに世をわくくると
と磬の音をさして常人のつと音より異なり
地をさして曰くこの磬の音色ハ
心ある哉とあり過行しなり

既而曰鄙哉
磬乎莫已知也斯已而已矣深則厲

淺則掲

先づのつとて室とてさきに世に出でる
さるハ鄙とありあり磬乎に心をさめぬ
今世に己身を知ると莫とありありの
も今ハ己而已とありあり知ある者ハよ
なとて詩經より水の深ハ厲とあり
しとありハ即ち己の心を聖人民と信
むの大徳と知るの

果哉未之難矣

子張曰書小

云高宗諒陰三年言不何の

何ぞ必らざる高宗の

家宰小聽と三年

上礼を好めハ則

子路君子を問

曰く斯の如き而

子曰果哉未之難矣

聖人聞めし誠にこの人ハ世を思ふる心ハ

子曰書云高宗諒陰三年不言

何謂也 子張の問に書に殷の帝高宗御

必高宗古之人皆然君薨百官總已

以聽於冢宰三年 御意何ぞ高宗の御喪中

の冢宰の官人とも自己の職を總てて冢宰

子曰上好禮則民易使 好むる人礼法を

子曰君子曰脩己以敬 子路君子

曰如斯而已乎 曰如斯而已乎 曰脩己

以安人曰如斯而已乎 聖人ハ敬と云ふ

論語

卷

第

論語

卷

第

曰まはく己と脩め
て以て百姓と安

百姓と安んむるハ
堯舜も其猶病
諸

原壤夷俟して俟
子曰まはく幼に
て孫弟かろふ不
長して述ふと
無老て死不是と
賊と為杖と以て

其脛を叩く

闕黨の童子命
と將かう或ひと
之と問て曰く益
者與

吾其位一居と
見其先生與並
行を見益と求
むる者に非と速

心よあそくやうに思ひたれども同奉つる君子の
道と如斯而已とやと御答己身を脩るに敬を
以てする時ハ徳内よ充てて且さと人よ及しそのふ
とく然ハ人く安んむるを子路の心今必し御教の
まはく己と脩めてまはく己と脩めてまはく己と脩め
たが如斯の二ヶ条而已と云ふと 曰脩己以安百

姓脩己以安百姓堯舜其猶病諸

聖人又御答の趣ハ己を脩て人よ及し及ばざらば大
天下平なる事ハ聖人堯帝舜帝とついで其心病
かろふ諸と云ふ 聖人工夫をたらしむるの御教かろふ

○原壤夷俟子曰幼而不孫弟長而

無述焉老而不死是為賊以杖叩其脛

原壤ハ取主人のふるた友なる 老子の学流のよう
聖人のあのを来々を見うけけること 礼法をかろて

足をたうけける 夷として相俟るる 聖人地ぬら
まらうらふ 元来原壤ハその母の死去の時とも歌を
うたひしものありて 老氏佛氏としてさう 過るとり
なる 依て曰はくさうらふ 幼少より 孫弟かろふ 長
てもとと義理なることハツも述ふことかろ 新三年老
して死しむるをせめてやうに世の風俗をそとなくのハ誠
に盜賊なるかと仰せありて
杖を以てその脛を叩く

○闕黨童子將命或問之曰益者與

闕黨と云ふ邑の書生たり 社せざるを童子といふ
聖人の命令を相通むる役を蒙るがゆへに 命を
將とあり 賓客と主人とあはれしあはれする中
のその次あり
あはれ人の心よそのの定て 学問の道に進むる者
なる人 依て取主人の寵愛異と 子曰吾見其居
取主人へたがひ奉まつる

於位也見其與先生並行也非求益者

やうふ成と欲もる者也

也欲速成者也

禮記曰く童子とる者ハ

童子とる者ハ禮に循ハど己が位に居りて先生と

求むるといふを只速く成就せんと欲するのなること

仰らるる取上人此ゆへに賓客小まごづい給仕して拜揖

の他と異つるにハ

論語卷之三畢

五十一 王漢集舎非

